

平成28年度「指導と評価の年間計画」

教科名	地理歴史	科目名	地理B	学年	3年	単位数	3
指導目標	生徒が主体的に地理的な見方・考え方を培うことができるようにする。 世界の諸地域を動的・静的にとらえることができるようにする。 受験に必要な地理の基礎知識を身につけ、図表等の読解力を養えることができるようにする。						

月	時間	主な学習内容(項目)	主な学習活動(指導内容)と評価規準	評価方法
4	9	II部 現代世界の系統地理的考察 3章 人口、村落・都市 ①世界の人口 ②人口問題 ③村落と都市 ④都市・居住問題	<ul style="list-style-type: none"> ・世界の人口について、世界人口の分布の特徴や動態、人口構成や人口転換を考察する。 ・人口問題について、世界の人口問題を大観し、発展途上国、先進国、日本の人口問題の事例を考察する。 ・村落と都市について、村落・都市の立地や発達・機能や、日本の都市の特徴を考察する。 ・都市・居住問題について、その要因と発生のしくみを理解するとともに、都市・居住問題解決のために何が必要かを考察する。 	春季休業課題 行動観察 ノート確認
5	9	4章 生活文化、民族・宗教 ①生活文化 ②民族と宗教 ③現代世界と国家 ④民族・領土問題 前期中間考査	<ul style="list-style-type: none"> ・生活文化について、衣食住を取り上げ、それらの分布や地域的差異と世界の画一化について考察する。 ・民族・宗教について、民族と言語、世界の宗教分布や特徴、生活との関わりについて考察する。 ・民族・領土問題について、日本の民族や領土、世界各地の民族の共生についての課題を考察する。 	行動観察 プリント提出
6	12	III部 現代世界の地誌的考察 1章 現代世界の地域区分 ①地域区分とは何か ②地域区分の様々なスケール 2章 現代世界の諸地域 ①地誌の考察方法 ②東アジア	<ul style="list-style-type: none"> ・地域区分とは何かについて、地域概念や地域区分の目的、意義を理解し、有用性に気づく。 ・地域区分のさまざまなスケールについて、大地域と小地域のスケールによる違いを理解し、有用性に気づく。 ・地誌の考察方法を理解する。 ・東アジアについて、自然環境、中国の民族と人口、食生活と農業、工業化と経済発展、朝鮮半島の成り立ち、韓国の産業、隣国との交流などを項目ごとに整理する。 	ノート確認 行動観察
7	9	③東南アジア ④南アジア	<ul style="list-style-type: none"> ・東南アジアについて、自然環境、歴史と文化・民族、農業と変化、ASEANの工業と変化、及び諸課題について項目ごとに整理する。 ・南アジアについて、自然環境、ヒンドゥー教とインド文化、インドの農業、工業とIT産業の発展について項目ごとに整理する。 	行動観察 プリント提出
8	3	⑤西アジアと中央アジア	<ul style="list-style-type: none"> ・西アジア・中央アジアについて、乾燥帯が広がる自然環境に着目し、自然、イスラームの生活文化、交易と都市、資源と産業の面において、類似的な2つの地域を比較して考察する。 	夏季休業課題 行動観察 ノート確認
9	9	⑥北アフリカとサハラ以南のアフリカ ⑦ヨーロッパ 前期期末考査	<ul style="list-style-type: none"> ・アフリカについて、中近東文化と中南アフリカ文化という文化に着目した区分に基づき、自然、歴史的背景と文化、一次産品への依存、他地域との結びつきについて北部と中南部、両地域を比較する。 ・ヨーロッパについて、自然環境、域内の結びつき、農業・工業の変化、これからのヨーロッパについて項目ごとに整理する。 	行動観察
10	13	⑧ロシア ⑨アングロアメリカ	<ul style="list-style-type: none"> ・ロシアについて、亜寒帯が広がる自然環境の特徴、歴史と社会の変化、極東ロシアと日本の結びつきについて項目ごとに整理する。 ・アングロアメリカについて、自然環境、アメリカの移民国家としての発展、人口と都市、産業、世界のなかのアメリカ、アメリカとの結びつきの強いカナダについて項目ごとに整理する。 	行動観察
11	13	⑩ラテンアメリカ ⑪オセアニア 3章 現代世界と日本 学年末考査	<ul style="list-style-type: none"> ・ラテンアメリカについて、自然環境、大土地所有制と農業の変化、工業化と生活の変化という特徴ある事象と他の事象を有機的に関連づけて考察する。 ・オセアニアについて、自然環境、移民の歴史と多文化社会、アジアとの結びつきという特徴ある事象と他の事象を有機的に関連づけて考察する。 ・現代世界における日本の特徴について多面的・多角的に考察し、日本が抱える諸課題を探究する活動を通して、その解決の方向性や将来の国土のありかたなどについて展望する。 	行動観察 ノート確認
12 ～ 2	28	既習事項のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・センター試験に向けて問題演習などを通して既習事項の確認をし、地理的思考力の育成を図る。 	行動観察

単元指導計画

単元の名称 「現代世界の諸地域（オセアニア）」

1 基軸となる問い

オセアニアがアジアとの関係を深めている理由は何か？

2 単元の目標

オセアニアについて、形式的な地域区分に基づき、1つの大陸と太平洋の島々、移民の歴史と多文化社会、強まるアジアとの結び付きという特徴ある事象と他の事象を有機的に関連付けて動的に考察する。

3 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
オセアニアに対する関心と課題意識を高め、それを意欲的に追究し、捉えようとしている。	オセアニアについて、その地域にみられる地域的特色や地域的課題を地誌的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	オセアニアに関する諸資料を収集し、有用な情報を選択して読み取ったり、図表などにまとめたりしている。	オセアニアについて、その地域にみられる地域的特色や地域的課題、地誌的に考察する方法を理解し、その知識を身に付けている。

4 指導と評価の計画

	学習活動	評価規準・評価の観点
第1時限	<p>1 オセアニアの自然環境 【ねらい】 オセアニアの自然環境について大観させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> オセアニアの自然環境について写真資料などから読み取ったり、他の地域と比較したりして、その地域的特色を整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> オセアニアの自然環境について、既習事項を踏まえて、諸資料を活用するなど、意欲的に追究し、捉えようとしている。 <p>【関心・意欲・態度】（プリント記述）</p>
第2時限	<p>2 オセアニアの歴史と多文化社会 【ねらい】 移民とその政策に焦点を当て、オーストラリアとニュージーランドのそれぞれの国の特色について理解させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> オーストラリアが白豪主義から多文化主義へと移行した背景を、資料から読み取り、文章化してまとめる。 オーストラリアの歴史とニュージーランドの歴史とを比較し、その共通点・相違点を整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> オーストラリアの政策が変化していった要因を、諸資料から有用な情報を選択し、読み取った内容を適切にまとめている。 2つの国を比較することにより、2つの国の社会の特色について理解し、その知識を身に付けている。 <p>【技能】（グループワーク、プリント記述）</p> <p>【知識・理解】（プリント記述）</p>
第3時限	<p>3 オセアニアの産業 【ねらい】 オセアニアの産業について理解させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> オセアニアの農業区分を、自然環境などと有機的に関連付けて地図に表現する。 オーストラリアとニュージーランドを比較し、それぞれの国の特色を輸出品目などから理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> オセアニアの農業を、系統地理（農業）で学習した事項や自然環境などと関連付けて、地図にまとめている。 2つの国を比較することにより、それぞれの国の産業の特徴について理解し、その知識を身に付けている。 <p>【思考・判断・表現】（プリント記述）</p> <p>【知識・理解】（プリント記述）</p>
第4時限	<p>4 オセアニアとアジアとの結び付き 【ねらい】 アジアとの関係が強くなった背景を考察させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> アジアとの結びつきが強くなっている理由を、これまでの既習事項を踏まえて意見交流する。 オセアニアとアジアとの関係について、今後の両地域の関係について、課題も含めて考察し、意見交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> オセアニアがアジアとの結び付きを深めている理由を、これまでの既習事項などと有機的に関連付けながら、適切に表現している。 オセアニアとアジアとの関係の深まりについて、意欲的に追究し、捉えようとしている。 <p>【思考・判断・表現】（プリント記述）</p> <p>【関心・意欲・態度】（グループワーク、意見交流、プリント記述）</p>

学 習 指 導 案

教科(科目)	地理歴史(地理B)	学年・単位数	第3学年・3単位
単元名	オセアニア地誌(4/4時間)		
本時の目標	オセアニアがアジアとの関係を深めている理由を、既習事項などを踏まえ、諸資料をもとに考察させるとともに、今後のオセアニアとアジアとの関係を現代社会の動向から探究する。		
評価規準	<ul style="list-style-type: none"> オセアニアがアジアとの結び付きを深めている理由を、これまでの既習事項などと有機的に関連付けながら、適切に表現している。【思考・判断・表現】(プリント記述) オセアニアとアジアとの関係の深まりについて、意欲的に追究し、捉えようとしている。【関心・意欲・態度】(グループワーク、意見交流、プリント記述) 		
指導内容・ねらい		学習内容	指導上の留意点・観点別評価
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの復習 	SQ.1: 身の回りでオセアニアと関係のあるものは? <ul style="list-style-type: none"> ペアワーク。・原材料から類推する。 オセアニアと日本との関わりの大きさを実感する。 	<ul style="list-style-type: none"> 輸出品目から考察させる。
展開① 20分	<ul style="list-style-type: none"> 資料の提示と読み取り(第1段階) 政策転換の説明 資料の提示と読み取り(第2段階) 他地域とのつながり強化の説明 	MQ. オセアニアがアジアとの関係を深めている理由は? (第1資料、第2資料から2段階で考察) 《第1資料》 個別の考察、グループ交流 <ul style="list-style-type: none"> 貿易相手国の変化(アジアとの関係深化の事実確認) 昭和30年代教科書の読み取り(現在と異なる点の記述) カナダ国旗の変遷(国旗の変化が意味すること) ・各種の統計資料を用いて、白豪主義から多文化主義へ変化したことを理解する。 《第2資料》 グループごとに意見提示(発表) <ul style="list-style-type: none"> 日本の高度経済成長とNIEsの躍進(漢江の奇跡 etc) BRICs、VISTA(ドイモイ、改革・開放政策) APEC ・アジアとの結びつき強化の理由について、「イギリスがECに加盟したこと」以外の要素を、第2資料を用いながら説明し、既習事項との関連を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> 第1資料を提示し、個々に考察する時間を設ける。その後、グループで交流し、意見を交流する。 説明の際は資料を用いて行い、一方的な講義にならないよう留意する。 第2資料の考察 オセアニアがアジアとの結び付きを深めている理由を、これまでの既習事項などと有機的に関連付けながら、適切に表現している。 【思考・判断・表現】(プリント記述) アジアの経済発展を統計資料をもとに確認する。
展開② 15分	<ul style="list-style-type: none"> 試験問題取り組み①(誘導付き) 試験問題取り組み②(誘導無し) 	SQ.2: これまでの学習成果を活かし確認問題を解こう <ul style="list-style-type: none"> 個別で思考⇒グループで交流 オーストラリアと他地域との関わりについて出題されたセンター試験問題を提示し、着眼点を示した資料を参考に、これまで学習した内容から考察する。 個別で思考⇒グループで交流 オセアニアに限定しない範囲の問題を提示し、知識をどう応用して問題に取り組むか、知識を組み合わせる多面的に考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> 問題の解法を、ストーリーを立てて考察することで、オセアニア地域の理解につながることを実感する。 考察してもなかなか解答にたどり着けない場合にはヒントを提示する。
まとめ 10分	<ul style="list-style-type: none"> 展開①の資料、展開②の問題演習からの深化 今後の展望 	SQ.3: オセアニアの抱える課題は何か? <ul style="list-style-type: none"> 展開①、展開②を通して、オセアニアの特徴をまとめる。 オセアニアの課題として挙げられることを列挙する。 課題を踏まえたうえで、日本とオセアニアの関わりについてまとめる(文章で述べる⇒宿題提示) 	<ul style="list-style-type: none"> オセアニアの特徴をまとめ、アジアとの関係を深めた理由を再認識させたいうえで、今後の課題を考察する。 オセアニアとアジアとの関係の深まりについて、意欲的に追究し、捉えようとしている。 【関心・意欲・態度】(グループワーク、意見交流、プリント記述)

～地理・授業プリント (地誌：オセアニア編 4)～

《これまでの学習事項》 *補出時間を含む

第1時間目：オセアニアの自然環境

- ・写真による位置判定 (サンゴ礁 (グレートバリアリーフ)・乾燥地形 (ウルル)・フィヨルドの分布)
- ・オーストラリアの地形・気候 (人口分布等をカナダと比較して考察)

第2時間目：オセアニアの歴史と多文化社会

- ・オーストラリアの開拓時代の地図表現 (寄越絵図による表現)
- ・オーストラリアの政策とその変化 (白豪主義、先住民の生活)、ニューージーランドの先住民との共生

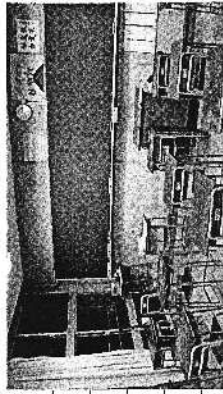
第3時間目：オセアニアの産業

- ・オセアニアの農業区分 (文章情報・気候を基に地図化、スノーヴィンディングス計画、ニューージーランドの農業区分)
- ・小麦カレンダラーの判別によるオセアニア地域の特徴把握

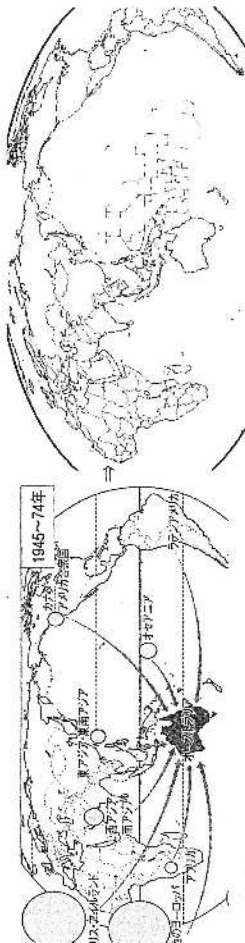
☆本時の目標☆

オセアニアが_____との関係を深めている理由を、既習事項を踏まえ、諸資料をもとに
 したうえで、今後の日本とオセアニアとの関係を_____から探査する。

Q.1：身の周りでオセアニアと関係のあるものは？



Q.2：オーストラリアに移住する人々の出身地・貿易相手国はどのように変化したか (複写)？



輸出相手国	1965年	1974年
イギリス	29.7%	17.7%
日本	16.0%	35.5%
その他	54.3%	42.9%

Q.3：オーストラリアをはじめとするオセアニアがアジアとの関係を深めている理由は何？

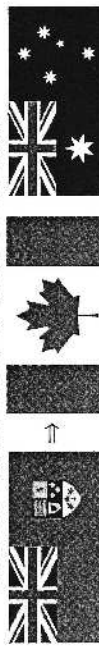
オーストラリアの位置と主要都市

アジアの位置と主要都市

太平洋地域の位置と主要都市

オーストラリアは、南緯の大部分を占めており、その気候は乾燥した地域が多い。また、その地形は多岐にわたる。アジアは、北緯の大部分を占めており、その気候は多岐にわたる。また、その地形は多岐にわたる。太平洋地域は、赤道を挟んで南北に伸び、その気候は多岐にわたる。また、その地形は多岐にわたる。

A：1962年の教科書の記述『中学社会地理 (帝国書院)』



B：カナダ国旗の変遷と、オーストラリアの国旗

※資料は上記のA～Cおよび左下Q.2

- ・Aより、1962年時点ではオーストラリアは「①」と呼ばれる政策を実施しており、Bの資料からもわかるように「②」(国名)との関係が深かったことが読み取れる。また、牧羊が盛んなことがわかるが、これは「③」(気候帯)が多くを占めているオーストラリアの気候に関係がある→
- ・Bより、昔のカナダの国旗と、現在のオーストラリアの国旗には「④」が示されているが、現在のカナダ国旗に④は見られない→
- ・Cより、「⑤」(年表中のある出来事)が、オーストラリアがアジアとのつながりを深めるきっかけとなったと言える→

《第2資料による考察》 *資料は別刷り

C：オーストラリアのあゆみ

年	事	項
1770	BCA年号	アボリジニー渡来
1770	クックが東海学を探検	ニュースウスウェールズを
1788	イギリス領と宣言	イギリス領と宣言
1788	イギリス、流刑囚を送る	イギリス、流刑囚を送る
1851	ゴールドラッシュ始まる	ゴールドラッシュ始まる
1901	オーストラリア連邦成立	オーストラリア連邦成立
1945	移民制限法発布	移民制限法発布
1967	ニローガからの大量移住始まる	ニローガからの大量移住始まる
1967	アボリジニー保護の連邦政策始まる	アボリジニー保護の連邦政策始まる
1973	イギリスがEGCに加盟	イギリスがEGCに加盟
1989	非白人移住の法的差別撤廃	非白人移住の法的差別撤廃
2000	第1回アジア太平洋経済協力会議(APEC)を開催	第1回アジア太平洋経済協力会議(APEC)を開催
2000	シドニーオリンピック開催	シドニーオリンピック開催

Q.4: 試験問題で力試しをしよう!

(1) 確認問題 (センター2016 追試)

問6 次の図5は、オーストラリアの輸出額の増減に占める主要な輸出手口の割合の推移を示したものであり、①-④は、アメリカ台表面、イギリス、中国、日本のいずれかである。イギリスに該当するものを、図5中の①-④のうちから一つ選べ。 [24]

*台湾、ホンコン、マカオを含まない。

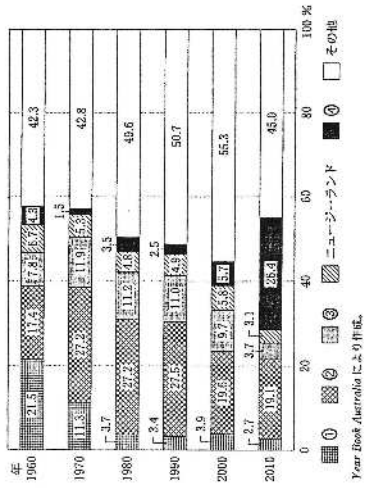


図5

(3) 応用問題 (センター2012 本試)

問8 次の表3は、アメリカ合衆国における1987年と2009年の単年別輸入額について、それぞれ上位8か国を示したものである。K~Nは、イギリス、中国、日本、メキシコのいずれかである。メキシコに該当するものを、下の①-④のうちから一つ選べ。 [24]

*台湾、ホンコン、マカオを含まない。

表3

	1987年	2009年
K	68,072	286,402
カナダ	70,644	224,911
西ドイツ	26,020	176,337
L	20,511	93,949
韓国	17,991	71,253
M	17,827	47,498
イタリア	11,633	39,235
フランス	11,177	34,034
総額	422,407	1,557,876

(国別単位 貿易統計年鑑) により作成。

① K ② L ③ M ④ N

(2) 応用問題 (センター2004 本試)

問6 次の表1は、食料品を輸出する日本の企業が海外に現地法人を設立した理由を輸出地域ごとに示したものである。表1中のX~Zは、アジア、オセアニア、北アメリカのいずれかである。X~Zと地域名との正しい組合せを、下の①-④のうちから一つ選べ。 [13]

*北アメリカはアメリカ合衆国とカナダを指す。

理由	地区	X	Y	Z
進出先での販売を拡大するため		30.2	22.6	10.0
品質・価格面で日本への逆輸入が可能のため		10.3	11.9	23.3
土地・建物などが安価なため		8.7	8.8	20.0
原料などの現地調達が可能のため		6.4	4.5	13.3
兵隊で安価な労働力を確保できるため		6.4	20.8	6.7
その他		38.0	24.6	26.7

調査年次は1999年。
統計年度は「我が国企業の海外事業活動」により作成。

	X	Y	Z
①	アジア	オセアニア	北アメリカ
②	アジア	北アメリカ	オセアニア
③	オセアニア	アジア	北アメリカ
④	オセアニア	北アメリカ	アジア
⑤	北アメリカ	アジア	オセアニア
⑥	北アメリカ	オセアニア	アジア

<解法 (考え方) とよえること>

《オセアニアのまとめ》

オーストラリアは、今から50年ほど前までは旧宗主国である(①)を初めとするヨーロッパ諸国からの移民が多く、貿易も盛んであった。しかし、農産物や資源の輸出先として(②)との結びつきが強まるにつれ、(③)は撤退された。(③)撤退後は(④)が最大の貿易相手国となった。ニュージーランドなどの島国もまた、(④)を含む(②)との関係を強めている。こうした情勢の中、1989年、オーストラリアの働きかけにより(⑤)が

結成された。21世紀に入ってから(⑥)との関係が特に強まっている。オセアニアの関係が変化した要因には、(①)のE.C(現E.U)加盟がきっかけとなったが、アジア諸国の(⑦)という側面が大きい。オーストラリアでは(③)撤退後、移民を積極的に受け入れるようになり、文化的多様性を相互に認め合い、それぞれの文化を高めていこうとする(⑧)を積極的に押し進めていった。オーストラリアの先住民である(⑨)やニュージーランドの(⑩)の伝統的文化等を保存するための取り組みも行われている。

Q.5: 日本とオセアニアとの関わり、およびオセアニアの今後の展望と課題について考察しよう

(キーワード: オーストラリア人の日本における旅行先、ワーキングホリデー、TPP、先住民問題)

<振り返り>

- ・積極的に自ら思考できた
5・4・3・2・1
- ・積極的に意見交流できた
5・4・3・2・1
- ・意見交流で考えが深化した
5・4・3・2・1
- ・オセアニアとアジアとの関係について理解できた
5・4・3・2・1
- ・単元を振り返っての感想。(アクティブ・ラーニング)はどうでしたか?

授業後の事後分析と今後の課題

導入

「身の周りでオセアニアに関係のあるものは？」という問いかけで、アイスブレイク、前時の復習を兼ねたペアワークを行った。鉱工業の学習成果が出ていたようで、活発なグループ活動が展開された。プリントには教室の写真を掲載したことで、身近なものがオセアニアと関わっていることを理解していたようで、スタートは比較的順調であった。

続いて、前回までの授業の概要が掴めているかを確認するために、「オーストラリアに移住する人々の出身地、貿易相手国はどのように変化したか？」という問いを設定し、簡潔に記すとともに、地図にどう表現したら良いかを考察させた。生徒は適切に地図表現をしようと努力する姿がみられた。ただし、導入において想定していた時間を超過してしまい、その後の展開での時間が十分取れなかった要因をつくってしまった。

<参観者より（感想、指摘事項）>

- 理系に関わりそうな石灰石、鉄鉱石などの話を何気なくできていた
- 生徒の答えに対してさらにクイズを出して、内容を深めようとしていた
- ウール、鉄鉱石など、実物教材を提示していて分かりやすい
- 図形表現図を利用することで視覚的に理解が深まった
- ▲導入で時間がかかってしまったので、Q.2は省略するか、もっと簡潔にして展開に時間を取ることもできた



導入：地図表現の作業に取り組む様子



展開1：グループ活動の前に個々で思考する様子



展開1：グループ活動で意見をまとめる様子



まとめ：オセアニアとアジアとの関わりについてまとめる様子

展開 1

「オーストラリアをはじめとするオセアニアがアジアとの関係を深めている理由は？」をMQに設定し、《第1資料による考察》、《第2資料による考察》という2段階でグループ活動を取り入れて考察させた。

第1資料は、「A：1962年の教科書の記述『中学社会地理（帝国書院）』」、「B：カナダの国旗の変遷とオーストラリアの国旗」、「C：オーストラリアのあゆみ」の3つの資料について説明した空欄の語句を補充しながら、資料から読み取れることを考察するという流れである。ここでは、オセアニアがヨーロッパ、特にイギリスとの関係を重視していたが、アジアとの関係を重視するように変化したことを読み取らせることを目的とした。第1資料のA・Bに関してはよく読み取りができていたが、Cについては、授業者が想定していたもの（1973年のイギリスEC加盟）とは違う解答（1989年のAPEC開催）をしている事例が多くみられ、意図がずれてしまった。第1資料については、後述されているように、「ヨーロッパとの関係が薄れたこと」、「アジアとの関係が深まったこと」に分けた方が良かったと反省している。

第2資料は、多くの統計から、有用な情報を取捨選択して読み取れることを考察するという流れである。ここでは、アジアの人口増加が顕著であり、ヨーロッパの人口が相対的に小さくなっていること、アジアの人口大国である中国、インドの経済成長が顕著であり、そのことからこれらの国でエネルギー資源の需要が増加していること、アジアにおいて造船や製鉄などの重工業が盛んになり、鉄鉱石や石炭の需要が増加し、工業原料の輸入が急増していることを読み取らせるのを目的とした。ここでは事前協議において資料が多岐にわたり非常に難解だったのではないかとの懸念もあったが、実際には生徒は資料をよく分析して意図する解答を見い出せたグループが多くみられ、グループワークは概ね成功したと言える。ただし、資料を分析して考察したのではなく、既習の事項を挙げただけの可能性もあるという指摘を受け、資料分析をさせることの難しさを感じた。

<参観者より（感想・指摘事項）>

- 第1資料：個人で考察する時間が十分に取られていて良かった。
- 第1資料：読み取りのヒントとなる文章があることで取り掛かりやすい。
- 第1資料：国旗の変遷の図は資料として面白い（興味を喚起させる）。
- 第2資料：資料の読み取り、考えるきっかけとなるヒント（写真パネル）が用意されていて、そのヒントと資料が関連していて、多角的な理解ができた。
- 全体の意見を吸い上げる点でホワイトボードは有効な手段である。またホワイトボードを貼る位置が指定されていて生徒がスムーズに行動できた。
- ▲第1資料：A・Bはヨーロッパとの関係が相対的に薄れ、Cはアジアとの関係が強くなることを示しているのに、A・BとCを分けるのが適当ではないか。
- ▲第2資料：資料の読み取りはできていたと思われるが、フィードバックが不十分であったように感じた。
- ▲ホワイトボードは文字が細かく見にくいグループがあったので、字数制限をするのも手である。

展開 2

展開1における学習事項や、前回までの授業の内容も踏まえて、センター試験の過去問題を利用して生徒の理解力を図る時間とした。オセアニアがアジアとの関係を深めているという事実とそのように関係が変化している要因を踏まえた問題を提示し、問題の解答のみならず、解法（考え方）も考察させるように指導した。1問目は確認問題として、オーストラリアの貿易相手国の割合を年代別に示したグラフを読み取るもので、授業内容を理解していればすぐに解答できるものを用意し、正答率は高かった。2問目は応用問題として、オセアニア地域の特徴を表から考察する問題とした。これに関しても学習事項を踏まえて表を的確に読み取り解答することができていた。しかしながら、展開1までに時間がかかりすぎてしまい、用意した最後の応用問題に十分に時間を割くことができなかった。

<参観者より（感想・指摘事項）>

- 授業で行った内容について、問題演習があることで集中力が高まって良いと感じた。

まとめ

単元のまとめとして、「日本とオセアニアとの関わり、およびオセアニアの今後の展望と課題について考察しよう」という問いかけに対してまとめる活動を行った。これについては前回までの授業内容も踏まえての考察で、多角的なまとめ方が想定されるが、時間が十分に確保できずに不十分な状態で終了となってしまった。入念に時間のシミュレーションをしたつもりではあったが、結果的にタイムコントロールができなかったのは今後の課題である。

< 参観者より（感想・指摘事項） >

- オセアニアと日本との関わりを考えることで、当事者意識をもてるものとなった。
- 現在のオーストラリア（オセアニア）の立ち位置を考える機会となった。

生徒の自己評価

項目	5	4	3	2	1
積極的に自ら思考できた	20人	10人	3人	0人	0人
積極的に意見交流できた	20人	9人	4人	0人	0人
意見交流で考えが深化した	21人	9人	3人	0人	0人
オセアニアとアジアとの関係について理解できた	20人	11人	2人	0人	0人

5：当てはまる 4：やや当てはまる 3：どちらとも言えない 2：やや当てはまらない 1：当てはまらない

< 単元を振り返っての感想（一部抜粋） >

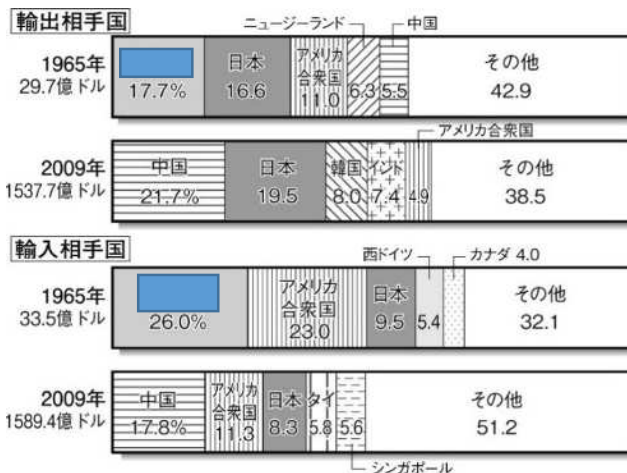
- ・話して学んだことは、文字をつらつら書く授業より記憶に残るので非常に良かった。考えられる時間があって良かったと思います。
- ・アクティブ・ラーニングは、最初は微妙だったが、やっているうちに少しずつ楽しくなってきた。楽しく勉強して記憶にも残るのは素晴らしい。
- ・自分の意見を交流できたり、様々な資料を組み合わせる考察できた。
- ・楽しく知識がついたと思います。グループの皆は、ちゃんと意見を持っていて、交流が楽しかったです。
- ・イギリスのEC加盟は、オーストラリアにとって大きな出来事なんて知らなかった。
- ・ただ授業を聞いているだけじゃなかったのも、いつもよりは頭に入りやすかった。

考查問題の事例

・研究授業においては問題演習の機会を扱ったので、授業プリント（HR通信 No.110）のQ.4はそのまま考查問題の事例としても扱えるものと考えている。ただしそのまま定期考查に出題すると、単なる暗記になってしまうので、定期考查では学習内容を別の問い方で確認する形式となった。

< 定期考查で実際に出題された問題 >

問：図はオーストラリアの貿易相手国の変化を示したものである。1960年代まで最大貿易相手国だった国を指摘し、貿易相手国が大きく変わった契機として適当な出来事を答えよ。



解答例：イギリスのEC加盟